

真をとる場合、三脚を使うのもよい。

双眼実体顕微鏡のない場合、生徒用顕微鏡（直筒）に対物レンズ×4を使い。落射照明（直射日光）によって撮影するとよい。

(ロ) 顕微鏡（直筒）に自作アダプターをとりつける。円筒（接眼レンズ）との間のパッキングとして、ゴム管を1回巻きつけてから、アダプターをかぶせるとよい（図2）。

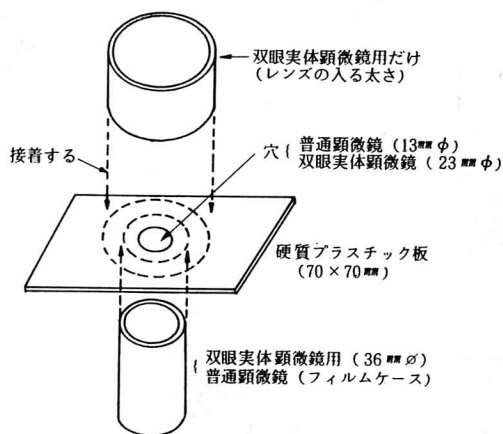


図1 アダプターの作り方

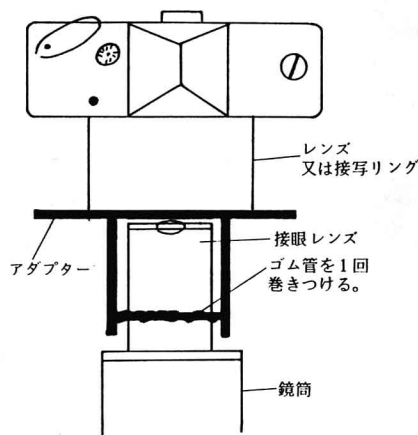


図2 カメラと顕微鏡とアダプター

- (イ) プレパラートを視野の中央に移動させ、ピントを合わせたら、カメラをアダプターの上に載せ、顕微鏡の光軸を合わせる。カメラの絞りは、開放、距離は無有限大(∞)に合わせる。
- (ニ) ファインダーをのぞき、粗動ねじを回わしてピントを合わせる。高倍率や中間リングを使用する場合、視野が暗くピントが合わせにくい時には、(イ)のように明るくしてからピントを合わせる。
- (ホ) 光源は、自然光がのぞましい。顕微鏡写真をとるには、明るさ（輝度）の大きいことが必要である。輝度とワット数は一致しないので、注意が必要である。顕微鏡写真電球 6 V 30W も 100 V 500W の映写用電球も、輝度は、ほとんど同じである。
- 落射照明の場合（双眼実体顕微鏡や低倍率の 4×7, 4×10）は、直射日光でよいが、普通顕微鏡の場合、光源装置を使わず直射日光をとり入れるのは、注意が必要である。
- 反射鏡は、平面を使うこと、カメラをアダプターにのせてから、直射日光をミラーよりとり入れることなどを厳守する必要がある。窓際で十分な明るさがとれる場合は、もちろん、直射日光をさけることである。

(ヘ) TTLカメラの場合は、ファインダーをのぞき、シャッタースピードを決める。

露出計内蔵でないカメラの場合、 $\frac{1}{2}$ ~ $\frac{1}{30}$ 秒の範囲でいろいろ撮影してみる。カメラのファインダーより光が入るのを防ぐため、片手でファインダーをふさぎ、シャッターを切る。レリーズを使用するとよい。

※ フィルムは、ASA 400~1000がよい。カラーは、ネガフィルムより、リバーサルの方が明暗の階調も美しく、色の再現もよい。

※ フィルターについては、専門書にゆずる。

※ 接写リングのある時は、カメラよりレンズをはずして撮影すると、視野が拡大され、露出計も使いやすい。専用の顕微鏡撮影用アダプター使用の場合と同じ効果である。